

ところで、わが国の事情について見れば、明治維新以降、欧米先進諸国に範をとり、ひたすら近代化路線を突進しつづけて来たわけであって、第二次世界大戦の敗戦によって、かえって民主化を前進させ、主権在民の国家となり、敗戦後の窮乏から、人類史の奇跡とも見られる経済復興を成就し、工業化の進展を早め、先進諸国に対して、いわゆる師に勝る優等生的存在となったのである。

しかしながら、先進諸国のかかえる近代化路線の矛盾についても、師に勝る優等生であって、彼等以上に深刻な矛盾を包蔵し、かつ露呈しつつある存在状況にある。

いったい近代化が巨大になるにつれて露呈されてきた深刻な矛盾の根源は何であるだろうか。

民主化も工業化もその源流は西欧に発したものであり、前者は市民が政治的解放と自由を求める精神によるものであったし、後者は近代科学の発達が技術の進歩を産み、それが生産様式の大変革を招来するという筋道によるものであったことは、言うまでもないが、近代科学を発達せしめたものは、人間の合理性であり、これまた人間の解放と自由を求める精神である。両者いずれも何よりも人間の立場に立っているのである。このあり方を、ヒューマンイズムと呼ぶことができよう。ただし、ヒューマンイズムの立場もここでは限定して見ることが妥当であろう。すなわち、それはヨーロッパのヒューマンイズムであり、近代ヒューマンイズムとすべきである。

近代化の流れは17世紀以降西欧中心の世界史の動向を形成し、その内容としての2つの相関する特色もグローバルなものとして今世紀に至ったわけであるが、上述のように見て、その原理は、いわゆる近代ヒューマンイズムであるということができよう。

このようであるならば、近代化の進展に生じた深刻な矛盾の根源は、じつにこのヒューマンイズムそのものにあるとしなければならない。ヒューマンイズムこそ望ましい人間の在り様であることを疑う者があったであろうか。どのようにして矛盾の根源であるのであろうか。われわれは、つぎのように考えるのでなかろうか。すなわち、われわれは、何タイズムと称する多くの主張を知っているわけであるが、イズムは、その何々と言表するものを絶対化する危

険を包蔵していることに気づかなければならない。ヒューマンイズムもイズムの危険性を包蔵している。その危険とは、人間を絶対化することに他ならない。人間を絶対化した人間は、人間の力の信仰にはしる。この力をふるって、他を支配することを飽くなく追求実現しようとする。その帰結するものは何か。対自然、対人間、対自己自身という人間の生き方について見ればどうなるか。

自然とのかかわりにおいては、「人間と環境の最近の諸問題は、人間の社会も、自然環境と共に、より大きい生きた系をつくる一つの要素にすぎないこと、そしてその大きな系における秩序の消滅はその系全体の死を意味することを私たちに教えてくれています。」<sup>注2</sup>という指摘を無視してひたばしることになる。人と人とのかかわりにおいては、力の強いものが他を支配しようとする。人間集団は集団相互の間に力の抗争を招く。今世紀2つの大戦は、最も生々しいかつ戦慄すべき証左であるだろう。しかもその恐れは、近代の原理をこえない限り消滅しないと見られるのではなかろうか。民主化の方向は、いたずらに多数の横暴、少数の卑屈と反噬に転落する。自己自身においてはどうか。自己が自己をコントロールする方向には進まないで、自己中心に目は他人に向けられる。自己の利益を貧欲に追求して他（他の人間と自然—生物）を思いやることをしない。

これはまさしくヒューマンイズムの破綻である。近代化の原理であるヒューマンイズムは、このままでは、人類の未来をささえることはできない。原理は転換しなければならない歴史的境位に今日はあるのだと言わなければならない。欧米先進諸国に範を求めてきたわが国、しかもそれを負の効果において超え出たと目されるわが国においては、とりわけ真剣にこの問題の解決に当らなければならない。

この問題の解決は、政治の力や経済の力によるのではない。それは教育の力に待つより外にない。われわれが望む、望ましい人間像の問題の根底にこのことが存在している。

問題解決の方向はどうあるべきであろうか。紙幅の都合上端的に言えば、破綻した近代ヒューマンイズムを真正なヒューマンイズムに回復すること。この意味で近代をひらいたルネサンスに代って再度のルネ